
ひぐらしのなく頃に 反

チャッピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に 反

【Nコード】

N8364M

【作者名】

チャッピー

【あらすじ】

「ひぐらしのなく頃に」の性転換バージョン。内容は、本編を少し変えた物。鬼隠し〜暇潰しまで書く。

登場人物

部活メンバー

まえばらけいこ

前原圭子

竜宮レン（りゅうぐうれん）

本名

りゅうぐうれいん
竜宮鈴韻

そのさきみおん

園崎魅音

ふるでりよう

古手稜

他の人々

そのさきしおん

園崎詩音

たかのみろく

鷹野三六

ほうじようさとこ

北条悟子

そのさきたつき

園崎竜鬼

あかさかまもり

赤坂守

とみたけ

富竹じゅんこ

おおいしくらこ

大石蔵子

いりえきよう

入江京

そのさきかいと

園崎海斗

ちえるい

知恵留伊

登場人物（後書き）

キャラはこんな感じで。性格は、本編でわかります。

ちなみに、園崎竜鬼っていうのは、おりょうさんのことです。

園崎海斗はあかねさんです。

プロローグ

どうせ引き裂かれる。それよりも、身を引き裂かれなかっただけマシだったわ。

信じてた……………いや、信じてたわよ。今だって、この瞬間だって……………！

薄々は気付いてたわ。信じるのは、認めたくないだけって。

そんな、アタシに言い聞かせるような涙声が、すっごく、馬鹿、らしくて……………。

機械的に繰り返すそれはおさまって、とっても静かになった。ひぐらしの声、騒がしいわ。ひぐらしの声だけ……………。

なのに、彼のそれは、まだ、聞こえてた？ そんなわけ、ない。そんなわけないわよね。だって言うのを彼はやめているんだから。泣いているのはアタシだけ。

彼は、泣いてなかった。

彼がそれを繰り返し口にしても、表情も感情もなかった。

彼が、アタシのために流す涙がないなら、アタシも。

彼に流す涙はいらないはずなのっ！

それなのに……………痛み、目を潤ませてしまうのは……………何でなの？
もう十分でしょ。

アタシはもう十分に心を痛めてるわ。

……………そして、何度も何度も、痛む心を捨てるかどうか迷ったのよ。でもアタシは頑なに、捨てることを拒んだじゃないの。

捨てたら、もっともっと楽になれるのに。

そう知ってて、アタシは、信じることを選んだの。

そのつらい苦労は、アタシしかわからないし、アタシしかねえから
えない。

ねえ、アタシ。

アタシはすごくがんばった。

だから、ね。

もう、楽してもいいんじゃない？

捨てるんじゃないの。

彼と一緒に置いてくの。

そう、花を手向けるように。

さあ、落ち着いて、落ち着いて。

もう、右腕、痺れちゃってるね。

でも、やるのよ、がんばって。

一つ振るたび、忘れて。

親切が嬉しかった。

優しい笑顔が好きだった。

ほっぺをつつつくのが好きだった。

そんな君がはにかむのが好きだった。

これで最後よ。

これで振り下ろせば忘れるんだから。

君に送る……………アタシからの、最初で最後の、花束。

もしかして、アタシは君のことが……………好きだった。

難見沢へ帰る

誰かがずっと謝っているの？ 彼は何を謝っているの？
でも、意識的には聞かないことにした。

親類の葬式のため、都会に戻ってきた。久しぶりの都会。先月まで住んでたのに、都会の賑やかさにびっくりしたわね。

いろんな所から聞こえる横断歩道のメロディ。ビルの建ち並び、高速道路がこちらこちらに曲がりくねっている。駅前の選挙の演説も今となっては懐かしく思える。

今住む土地はそんな賑やかさはないわ。あるのは、せみの鳴き声や、清流のせせらぎ。そして、ひぐらしの声。そんな静けさに寂しさじゃなくて、安らぎを感じるようになったのは最近。

でもこの土地には本当に何もない。

気がきくハンバーガー屋さんや自動販売機。レコード屋やレストランもない。ゲームセンターだってないし、アイスクリーム屋さんなんてもってのほか。

最寄りの町に行けばあるけど。なにせ、自転車で一時間よ。

でもそれが不便を感じる必要はなかった。

前は、レコード屋やゲームセンター、アイスクリーム屋もあったけど、利用してなかった。アイスクリーム屋は十年も住んで一度も立ち寄ったことはなかったわ。

……一度ぐらい食べればよかった。ちょっと後悔。

まだ誰かが謝っている。何でそんなに謝ってるの？こんなに謝ってるんだから許せばいいのに。

謝られている人にアタシは少し苛立った。

彼だつてもう謝らなくてもいいのに。

それでも彼は謝った。謝り続ける。

ねえ、謝られてる誰かさん。もう許してあげてよ。謝って許されない罪なんてないわ。

もし、取り返しがつかなくなったら？ とつても深い罪を犯したら？ それも許してあげるべき。彼が謝つてもどうにもならないんだから。

それでも彼は謝り続ける。

ねえ、もう許してよ。こんなにもみじめな声で謝っているんだから。

「圭子、もうそろそろ着くぞ」

父に言われ、まどろみの中から目を覚ました。

列車が終点に着いたみたい。

新幹線、電車を次々と乗り継いで数時間。

窓から見る風景は、あの都会と同じ国であることを、いや、同じ時代であることを疑わせた。

ここから山道をはしった。

うつそうと木が生い茂る間を通ったその先に、今のアタシの住む村、離見沢があつた。

圭子の朝

夏だというのに、朝の空気はとても冷たい。でも、肺いっぱい
ため込めるほど澄んでいた。

窓を開けると一面に広がる緑、緑。

お隣さんはずーっと向こう。だから、この景色はアタシ一人しか
見てないと思う。

もう一回。深く深呼吸。

適当に、今日の用意をして階段を下りる。

リビングには、お母さんだけ。お父さんは、朝まで仕事を頑張っ
てるんだ。

お父さんは画家という風変わりな仕事をしている。この仕事がま
た呑気なものなの。好きなときに、起きて、寝て、仕事して。なん
か楽そうだったから将来、画家になりたい、っていったら、お父さ
んはすっごく喜んだ。……楽そうだから、なんて絶対言えない。

お母さんの朝ご飯はすごい。

「アタシ、運ぶよ。」

食事を並べると、何とも典型的な朝ご飯。のりに漬物に生卵、焼
き魚。私の母は恐ろしい……！

スケジュールとは縁のないお父さんとは反対で、ソツがない。

鼻歌を歌って、味噌汁の鍋を運ぶお母さんは、すっごく機嫌そう。
「引っ越してきて、早起きするようになって、偉いわ。」

「朝ご飯が食べれないだけよ。」

褒められて、悪っぽく振る舞った自分がちょっと可愛く見えた。

「お母さん、ご飯、大盛りにして。」

「あら、太るわよ。」

「エネルギーつけときたいの。」

湯気の立つご飯を、のりで一口。その後、ご飯に穴を開けて、そ

の中に生卵を入れる。ご飯を混ぜてまた一口。時折口に運ぶ漬物も美味しい。

うん、美味しい。今日も絶好調。

お母さんは、アタシが食べるのを、微笑みながら見ていた。

「圭子にご飯を毎日食べるようになってうれしいわ。」

都会の頃は、ギリギリまで寝ていた。朝ご飯なんて全く食べてなかった。

お母さんの朝ご飯をボイコットすることが、塾を強制されたアタシの唯一の反抗だったのかも。

……反抗期、だったのかな？

全く朝ご飯に手をつけなかった古い自分。今居たら、ひっぱたいてやるわ。うん。

お母さんは、ちらりと時計を見て、アタシににやにやしながらいった。

「あら、もうレン君くるんじゃない？ 早く早く。」

お母さんに急かされ、最後の味噌汁を喉に流し込む。そして、玄関に急ぐ。

レンっていうのは、アタシのクラスメート。世話を焼くのが好きで、いつもアタシを迎えに来てくれる。お母さんは、男の子と登校というシチュエーションを楽しんでいるみたいだった。

アタシとしても、思春期時期の男の子と行くのは恥ずかしい、というかなんていうか。まあ、こうして律儀に待ってくれてるんだから、待たせるのは悪い。

……ていうか何時から待ってるのかな？

「レン君にお漬物ありがとーって伝えといて！」

そういえば今日の漬物、ちょっと違ったわね。もっと味わえばよかった。

「うん、わかったー！ 伝えとく！」

登校 レン&魅音

「圭子ちゃん！ おはよう！」

爽やかな朝にぴったりの快活な挨拶が聞こえてきた。

「レン、早いわね。たまにはのんびり遅刻してもいいよ。」

「寝坊したら圭子ちゃん待たせちゃうよ。」

やさしいヤツ。ほんといい子ね。

「その時は置いてくよ。」

「圭子ちゃん冷たい。いつも待つてるのに……。」

「さくさく置いてく。きりきり置いてく。」

「どうして冷たいんだろ。だろ？」

レンが困った表情を見せる。人の言葉にすぐ反応する、楽しいヤツ。

「嘘よ。ちゃんと待つてるから。」

その一言で、レンの緊張の糸をほどいたみたい。あら、顔が真っ赤ね。

「わ、そ、その。……ありがとう……。」

「ちゃんと、レンが来るまで。ずっと、ずっと。」

「あああ、ず、ずっと……。」

レンが顔を真っ赤にして湯気を出しながらショート。レンはこっち系のは弱いらしい。これだけからかう価値がある人って少ないかも。

「レンって、ロマンスものの小説って読む？」

「え、ええっと、ない……かな。」

その様子から、読みたいけど、恥ずかしくて読めないみたいね。読んだら大変。赤面してぶっ倒れるのがきつとオチね。

「あ、そうだ。お漬物ありがとってお母さんが言ってたよ。」

「どういたしまして。どうだった？ しよっぱくなかった？」

別にしよっぱくない。むしろあっさりしたのがめだってるわ。：

どうもアタシは素直に「おいしい」って言えないのね。

「その前に。あれ漬けたのってレン？ それともレンのお母さん？」

「え？ 何でそんなこときくのかな？ お、おいしくなかった…？」
今度はおろおろわたわた。

「レン？ レンのお母さん？ どっち？」

「何で作った人聞くの？ 圭子ちゃん？」

「どっちが作ったかで感想が全く違うの。」

「ええっ……？！」

料理の過程を思い出しながら調味料の分量を指折りしながら思い出している。別にいじめてないんだけど。ま、からかわずにはいないの。女が男いじめて……何やってんのかしら、アタシ。

レンは、何回か言葉を飲み込んでおずおずと口をあけた。

「ぼ、僕だけど……。」

「すっごくおいしい。」

「え？」

「前回と続いてなかなかだったよ。お米との相性は最高だったわ。」
また真っ赤になる。ぼーっとした感じで。つくづくからかいがいのある子ね……。

レンが悪女にでも引つかからないことを願わなきゃ。がんばってね、レン。アタシが人に並べるぐらい鍛えてあげるわ！ なんて勝手に決心する。

「行こう！ レン！ 魅音を待たせるとうるさいから！」

このままずーっとぼーっとしてそうなレンを正気に戻して、アタシ達は学校へ走った。

このすぐ真っ赤になってぼーっとする子は竜宮レン。まだ知り合っただけで一月も経ってないけど、変わってるのは名前だけじゃないのはよくわかる。

「魅い君！ おっはよー！」

次の待ち合わせ場所で、アタシ達を待つ人が見えてきた。こっち

に気づいたのか、手を振ってくる。

「おう！ 来た来た。おっせーよ、おめーら。」

「遅いのはあんたでしょ。魅音。」

レンの律儀さと正反对でマイペースなヤツ。

こいつは園崎魅音。一応一番の上級生でクラスのリーダー。

「よう。レン。そして圭子！ 何年ぶりだよ？」

「二日しか休んでないじゃない！」

「ああ。そうか？ 前はこんなにチビだったのになあ。」

魅音が地上ーメートル離れた所に手が！

「アタシって、引越したの、先月よね？」

「こんなに立派になりやがって。いい男を探せよ。」

丁寧にハンカチまで出しての泣き真似。朝から土曜八時のノリ？！

「へえ、苦労したのって誰かしら？」

「可愛くなりやがって。ブラ、新しいサイズ買っただろ。」

「買ってないわよ。」

「いいや、買ったな。先週お袋さんと買っただろ？」

「あれはお母さんが……ってなんでそんなんしってんの？」

アタシの問いに、魅音がちゅちゅと指を振ってみせる。なんの真似よ。

「おいおい。園崎魅音の情報収集能力をなめんなよ。圭子の昨日の夕食からスリーサイズまでお見通しだからなあ？ レン。圭子のスリーサイズ。気になるだろ？」

「わわっ、す、すりーさいず……。」

「ちょ！ 魅音やめてよ！ レンも赤くなるなーっ！！」

「どうだったよ。都会は。」

下品モードから復帰した魅音が、ようやくまともな話題へ変えてくれた。

「葬式に行っただけよ。騒がしかったわ。」

「で、見つけたか！ 頼んだヤツ！」

「だあかあらあ。アタシは葬式に行っただけ！ おもちゃ屋に行く暇はないの！」

「ちつつち。おもちゃ屋とボビーショップは別だぜ。特に洋モノはこつつぢゃねえからな。」

「魅い君。またゲームの話？」

レンが軽く笑うと魅音が得意げに笑って見せた。

「そ！ 圭子に洋ゲーのカタログを持ってきてほしかったんだがなあ。」

洋ゲーってのは輸入ゲームの略。こういうといかにもマニアっぽい。

「通販で取り寄せればいいんじゃないの？」

「ま、そうするか。またプレイングの熱いのを入荷するからなあ！ レン、覚悟してろよお！」

「え、わ、わかりやすいゲームがいいかな、僕……。」

魅音は、カードゲームやボードゲームなどの愛好家で、いろんなゲームを集めてるらしい。レンによれば、魅音の部屋は何十種類ものゲームの博物館って。

「面白いゲームならアタシにもやらせてよ。」

「お。いいぜ！ 圭子がよければけどな。俺らのレベルは高いぜ！」

「上等じゃない。アタシだって。負けるつもりは一つもないから！」
「やった！ じゃあ圭子ちゃんも一緒に遊ぶんだ！」

レンが全身で喜びを表してアタシと魅音の顔を見比べている。魅音がゲーに親指を立てるとレンは今より倍に表情を明るくした。

「やったあ！ 圭子ちゃんが一緒なんだ！ わーいわーい！」

レンはやたら嬉しそうだった。これだけ親しそうなのに、まだ転校して一月を経ってない。転校生のアタシにいろいろ気遣ってくれるのがよくわかる。だから、アタシもみんながたくさん気を遣ってくれないよう、溶け込む努力をしなきゃって思う。自分でも馴れ馴れしい、って思うくらいの方が、アタシにはよかった。

沙都史&稜 登場

この雛見沢の学校はほんとに小さい。クラスは、学年がほとんどばらばら。そんなばらばらの30人が同じクラスで勉強している。

昔は、もっと大きかったって。だけど何かの理由で合同教室になり、それが根付いたと。

初めは面食らったけど、今ではすっかり馴染んじやった。朝の子供のはしゃぎ回る声。学校じゃなくて、幼稚園みたいだった。でも、そんな賑やかさも、心地いいもののなね。

それまで先頭を歩く魅音が、レディファースト、といい、先をにやにやして譲る。

教室の引き戸。

アタシが先に教室に入れと？

何度も引つかかるほど、アタシは馬鹿じゃない……！

「レディファーストなんて。言い方が上手ね。いいわ。」

お手並み拝見。魅音はにやりと笑う。

「どうしたのかな？」

「レン。下がって！ あの子よ……。」

「！ 沙都史くん？」

あの子、って言うのは北条沙都史。年齢をわきまえず、アタシに刃向かう『ガキ』よ。口調がむかつくけど、それで腹を立てちゃ大げない。

問題は別にある。

「見え見えのワナね。引き戸の上の黒板消し。…見え見えよ！ 沙都史。」

引き戸の奥で、くぐもった笑いが聞こえる。

「見事だな！ 今回は、圭子の勝ちかあ？」

「いや。これで終わらないわ！ 絶対！」

「あはは！ がんばれ！ 圭子ちゃん！ 冷静になるか、真面目か、

情熱的、冗談っぽく？ よく考えてね！」

んんっ。そうねえ……。

……。

転校初日から壮絶なトラップコンボに見舞われたアタシだからこそ、慎重になれる。

複数のワナを多彩に仕掛け、本命のワナへ誘う誘導、連続ヒットの連鎖系トラップ、等。しかも狡猾なのは、やたら連発しないこと。忘れた時には、彼のトラップの術中にいる！

油断も隙もない、恐ろしい子ね。

「見たところ、黒板消しには、何も入れてないみたいね。」

初めてのトラップは、黒板消しに石が入ってあるもので打ち所次第で……。

「じゃあじゃあ、ガラガラって開けて落とせば？」

「それよ！」

沙都史の狙いはそれ。アタシに上を向かせて、引き戸に手をかけさせる。

引き戸の手をかける部分は、ガムテープと画鋏で、恐ろしいトラップだった。攻撃力最大。そのワナを偽装するため黒板消しを見せつけている……！

「見事よ！ だけど所詮はガ・キ。浅知恵なの！」

勝利だけを心に見て、ドアを開け、奥へ踏み込む。

足首の違和感。それは、縄跳びを足に引っかけた感覚。やられた後にはもう遅い……！

美しい角度で転ぶアタシ。

「圭子！！ 避けるっ！！」

魅音の鋭い声に、アタシはぎりぎりで身をひねって床に倒れ込む。「いい……たあ！？」

アタシの倒れる予想地点に墨汁が満たされたずりが置かれている……！ クリティカルした時のアタシ……。それは、とてつもなく

ひどい光景だろう。

「おはようございます！！ 圭子さんは朝から元気ですねえ……！！」
不様なアタシを小馬鹿にするような声が迎える。

「また腕をあげて、ひどいトラップね！ 沙都史……！！」

「私は何かわからないです。朝からついてない女性……！！」

「あんたあ……！！……いつ、いたたた……！！」

不覚に、転んだ時、腰をひねったらしい。……ずずりと比べれば……。
す、と、小さな手がアタシの頭にのる。

「圭子。痛い痛い飛んでいけ。」

小さなかわいいおててが、アタシの頭をほふふと撫でる。

「腰とか挫かなかった？ こうして撫でれば消えていくよ……。」
腰なら頭を撫でても意味ない……。と思ったけど、つつこまない。

こついうのは、行為じゃなくて優しさが大事だもんね。

「うん。ありがと。綾君のおかげで痛みがひいたよ。」

「わ！ 綾君、おはよう……！！」

「レンにおはよう。みんなにもおはよう。」

綾君は、かわいらしく、ぺこぺこかわいらしく頭を下げた。つ
られてアタシ達もぺこり。

「綾君は天使よ……。それに比べて沙都史……！！」

ぎつと睨むと、沙都史は目をそらして口笛を吹く。

「沙都史はいい子です。」

「いい子はこんなワナしないわよ……！！」

「言いがかりですよ……！！ 証拠もなにも……ふわあ……！！」

アタシは、沙都史の襟首を掴みあげる。こつするといいたずら好き
の猫よ。

でも、この子は猫より悪い……！！

「ゴ・メ・ン・ナ・サ・イって言いなさい……！！ 言わないとお……。」

アタシは、右手でデコピンを作り、ふるふると振るわせながら沙
都史のおでこに近づける。

「ぼ、暴力は違法行為です……！！ 証拠もなしに……！！」

「覚悟しなさい！　そうだが、この前、デコピンをぶつけたらベニヤ板が割れたなあ……………」

「ひひひひひひ……………。極悪女……………」

「変なこと言わない！！」

小さな手が、服の裾を引っ張る。

「圭子が二日休んだから沙都史は寂しかったんだよ。」

稜君つて。…そんな言われ方したら、何も言えないわよ……………。半べそをかいた、デコピンにおびえるいたずら猫を解放する。

「ああああああん！！　悔しくない！！うあああああん！！」

「泣いちゃだめ、沙都史。ふぁいと、おー。」

いたずら盛りの友人の頭を、そつと稜君は撫でる。この二人が同い年なのを疑う。

…………沙都史は、稜君の爪のアカを煎じて一リットルぐらい飲むべきだよ。

「今度はすつごいワナを仕掛けよう。」

…………ちよつとストップ…………。

そうやる光景を、レンがうつとりした表情で見ていた。

「あう……。かぁいいゝねえ。」

「持ち帰り禁止だぞ。」

「ええ……。…………こんなにかぁいいのに。」

「どんなにかぁいくてもだめだ。」

「ちよつと、ちよつとただだよ。あう……………」

レンが、可愛らしい顔で飛んでもないことを口走っている。

魅音によると…………レンは可愛いものにめっばう弱いらしく、しかもそれをお持ち帰りしてしまうらしい。

物でも人でも…………！

「物も人もやばいわよ。諦めなさい。」

「じゃあ、見るだけ。見るだけだよ。…………それならいいよね。ねっ？」

悔し泣きする沙都史にレンはうつとり。

もしもこの雛見沢で男子児童誘拐事件が起こったら、アタシは何であろうと、レンを通報しなきゃ。許してね。差し入れはかぁいいものたくさん持って行くわ……！

「おい！ てめーら！ 早く片付けろ！ 沙都史、すずりお前のだろ！」

魅音の一声で一氣に場の空気が戻る。すずりより、引き戸の画鋏はやばい！！ それは、アタシが刺さらないようにとる。仕掛けたのは沙都史でも、後片付けはみんなだ。

先生が来たときはつい今あった光景はきれいに片付けられていた。

「おう！ 間に合ったな。きりーっ！！ きよつけー！！」

クラス委員長の魅音が号令をかける。

沙都史&稜 登場（後書き）

圭子の固有結界について、意見があつたらなにかください。

難見沢分校（前書き）

著作何とかになりそうだから、作者の覚えている限りで書きます。

離見沢分校

ここの学校は、クラスは一つだし、学年もばらばら。だから、先生は、当然低学年の方へ向かう。

ほとんど上級生、アタシとレン、魅音は、自習みたいなカンジ。彼らは低学年を教えることが多かったみたいで、二人の勉強の進行は、アタシと比べて大きく遅れていた。

「圭子ちゃんの教え方はわかりやすいよ。ありがとう。」

レンが、チエック箇所をマーカーで塗る。

そして、やる気なさそうに、アタシはいすにもたれかかり、頭を後ろに反らす。

「教えてたら、アタシってこんなに理解してないんだーって思ってた。自信なくなるわ。」

「人に教えるには、人より三倍理解しろっていうしな。圭子は俺たちに教えていることで復習になんだよ。」

逆にこっちはめっちゃくちや。あんた、アタシより学年上じゃない！

「まー。俺は高校に行くつもりもねーし。そこそこ出来てりや十分。適当でいいだろ。」

「み、魅い君、そんなこと言わないでよ。圭子ちゃんがせっかく教えてくれてるのに。」

あ、チャンス。

アタシは、うつとりした表情で、レンのほっぺを優しくつつく。

「ありがと。大丈夫よ。レンは先生が高校に行かせてあげる。」

「わ…………あ、あう…………。」

「朝から夜まで付き合って、二人きりでプライベートレッスンよ。」

「ぷ！ プライベート…………トお…………。」

赤くなる。プライベートレッスンでなにを想像したのかしら。実に気になるわ。実況とかしないかしら…………？

「受験てのはこんなんを覚えなきゃなんねーのか？」

魅音が持っているのは、英語の単語がすみからすみまで書かれて
いる、英和辞書。

「まあ、大体は覚えとかなきゃね。テストに出るし。」

「受験するから勉強すんのか？」

「そういうことね。将来役たたないのは承知で。」

「こっちじゃな。出席日数がたりてりや進学でkinda。」

え？ 1 + 1級の常識、「受験Ⅱ勉強」をあつさり否定された。

「俺と違って高校にいくヤツはここには少ないみたいだしな。そんなところに行くヤツは、興宮の学校にいくんだよ。」

$$\begin{array}{c} \nearrow \\ | \\ \circ \end{array}$$

ここで、チャームがわりのベルがカライン、カラインと鳴る。

「よし！ 弁当タイムだぜー！！！！」

「圭子ちゃん。お昼にしよう」

難しい顔をしたのか、レンが、何倍も明るい笑顔を向ける。

「よし！
いっぱい食べるわよー！！」

沙都史と稜君がわっせ、わっせと机を持ってきてくつつける。

「圭子ちゃん。早くー早くー！」

レンが行儀悪く、箸をふっている。

「圭子さんの昼食は、寂しくパンの耳に決まっていますですよー！」

「さあ、恥を捨てて見せてくださいよ！ ほら、ほら！」

悪態をつく沙都史も、弁当のふたを開けてない。

年齢も性別も違う。

でも、仲間なの。

「じゃあ、魅音委員長の号令でいただきます。」

アタシ達の合唱が響く。

「ただきまーす！」

「あらあら、圭子さんのお弁当、奮発してますねえ？」

「あらあら、沙都史さんの弁当も奮発してるじゃないですか？ 煮

物がいい感じで、美味ですよ。」

みんなのお弁当を、勝手につつく。

初めは、男だらけの昼食にドキドキしたんだけど、魅音に見透かされ、すごく囃し立てられたっけ。

そして努力(?)　して、誰のお弁当でもつつけることに成功。ほかに女の子はいるんだけど、年が離れすぎてアタシを怖がって近づかない。

まあ、大体そんなもんよ。

年上は小さい子から見れば、近寄りがたい。

逆にこっちの男の子は気が楽。

「このれんくん、おいしいわ！　冷めてても味が抜けてない。これぞ、お袋の味ね！」

そう言うのと、稜君がちよっぴり口元をほころばせる。

「昨日の夕食の残りを、とっておいたんだよ。」

「稜君ってそう言うの得意なんだよな。」

たしかにね。このにんじんの花形も包丁で切ったらしいし。

「裁縫とか、洗濯も上手なんだよ。すごいよね！　すごいよね！」

「稜はいろいろとすごいんですよ！」

「いや、アンタが威張ることじゃないでしょ。」

すかさずつつこむ。

「僕より、レンの方が、料理は上手だよ？」

「え、その、えっと……えへ。」

確かに。レンの料理は、なんていうか……心みたいのなのが入ってるんだよね。

「これ、評判よかったから、また作ってみたんだよ。おいしいかな。」

「かなりいい！！　あ、魅音、アンタとりすぎよ！！」

魅音の箸を払いのけ、自分の分確保！！　ところが、沙都史も乗り出して、めっちゃめっちゃ。誰も、レンの分を残そうとしないところが、恐ろしい。

「いかが？ レンさんも料理が上手ですよ？ 圭子さんとは大違いですー！」

「だから、アンタが威張ることじゃないって……。」

「お前も圭子とかわんねーだろ。ブロッコリーとカリフラワーの区別、ついたのか？」

ざっ！ と、沙都史の顔色が変わる。

「わ、わかりますよー！！ わかりますものー！！」

「そうだよなあ。じゃ、これはなんだ。」

ちくわに包まれた、緑の断面。

「でも、それはきゅ、むぐ。」

魅音の合図1秒後で、稜君の口をふさぐ。ちくわのキュウリ巻きで、二択を迫るなんて……。

「え、……黄色がぶろこりい……緑がぶろっこり……？」

あう……でも、あおは……むぎゅ……うう。」

「み、魅い君、い、いじめちゃかわいそうだよ。」

「ま、授業ってことだ。おいおい、本当にわかってんのかよ？ 降参したらどうだあ？」

「わ、わかるもん……、わかる……わあああああん！！！！
とうとう泣いちゃった。さすが最年長。魅音の追い詰め方は格が違う。」

園崎家に嫁入りしたら、大変なことになるんじゃないかしら？

「あう……。かあい！ 悔し泣きの沙都史君かあいよー！！」

うつとりして、沙都史を見るレン。

「レンレン！！ 魅い兄がいじめるー！！ わあああん！！」

「かあいいかあい！！ 大丈夫！ 悪いお兄ちゃんは、僕がやつつけちゃうよー！！ えいつー！！」

すぱぱぱぱーん！！

「……………今、なにがおこったの？」

アタシと魅音は、顔にアザを残して、床に倒れていた。

「……………圭子は、初めてだよな。今日のは、初級レベル……………」

「こ、これより上があるって言うの?!」

もしかして、アタシ達、相当な格闘チャンピオンとおつきあいしてる…………!?

レンに抱きしめられている沙都史が、レンには見えないように、ぺろっと舌を出す。くっそー、沙都史め! レンを上手に使って!! 倒れているアタシ達を、稜君が、輝くような笑顔で、頭をなでなでしていた…………。

部活 ガン牌ジジ抜き！

「さて、諸君！ ただいま前原圭子君を我が部に入れることにしようと思うのだが！ …………… なにか異議はあるか？」

「ないです！」

「圭子さんの実力がどれほどか。見せてもらいますよー！」

「僕は、早くかかってこい、の状態だよ。」

ちよつと待つて。今どつという状態かさっぱりわかんないんだけど？ 第一『部活』つてなに？

「我が部はだな。社会のあらゆる状況にんじて対応する……………」

「つまり。みんなでゲームをする部活なんだよ。」

稜君だけが、アタシの問いにあつた答え。

……………じゃあ、ゲームして楽しくやればいいわけ。

「そう！ 部活第一条！ 沙都史、答えろ。」

「『いつでも楽しくしなくてはならない』ですよ！」

「よろしい！ じゃあ始めるぜ！ 今日はスタンダードに、えつと

……………、これだ。ジジ抜き！！」

ジジ抜きね。確かにずいぶんスタンダード、つて、普通、ババ抜きじゃないかしら。

「魅音さん。バツゲームはなんですか？」

魅音は笑つて、一回転でポーズを決める！

「今日は初心者もいることだし！ 今日は、落書きの刑でいいかなあ。」

「え、油性じゃないよね？」

は？ 顔に油性つて！ そんなの、たわしでもおちにくいじゃない！

ま、まあいいわ。アタシの実力見せなきゃね！

「くくく。圭子のカードを右から言っぜ。3、J、11、Q、4、
だろ？」

「……………ぐ。」

「ちなみに、ダイヤの3がジジだよ。」

「きゃああああああああああ！！！」

「よっしゃ！ アガリ！」

「私もアガリです！」

「きゃあ！ れ、レンは、鬼じゃないわよね……………？」

「ごめんね。これがJ、だよ。アガリ。」

何これ。

五戦して、全部アタシの負け！？

ありえない、ありえな、ちよいと待って。

「ね、ねえ、これ傷物よね？ まさか……………」

「部活第二条！ 『勝つための努力を怠るな』！」

や、やっぱり！

この傷で、こいつら、何のカードかわかっている！

「大丈夫だよ。傷は特徴的だから、圭子ちゃんも覚えれるから。」

レンの言う通り。傷はわかりやすい。

仕方ない。アタシもやるか！

「うーん。アタシは8がほしいんだけど？ これかしら？」

「さあ、引かないことにはなにもわかりせんよ？」

沙都史の顔色が変わる。いかにも引かれたくない。そんな表情！

「……………！ よっしゃあー！！」

「そんな！ 2は、一番わかりにくいはずなのに！ どうして！」

ふふ、武器は傷だけじゃないわ。表情。ここに人の感情がでるもの。

沙都史、破れたり！

「これが2だな。あれ？ おかしいな……………」

「あれね。魅い君が間違えるなんて珍しいね。」

「そんなはずは………、！ まさか、圭子！ お前！」

「あははは！ そうよ！」

『傷』の付け方はいろいろある。そう、彼らの手段は、爪が多い。

だから付けてあげたの。アタシの『爪』でね！

「ダイヤの2を偽装！？ あじなまねをする人ですね………！」

「一矢報いた圭子だね。パチパチ。」

綾君が、指で拍手する。

「まあ、負けは確定だけど。魅音から一本とれたから。満足かしら。あはは。」

「おい、圭子。お前、負けは嫌だろ。」

「そりゃそうよ。」

魅音がまたにやりと笑う。

「一騎打ちしようぜ。俺と。」

部活 勝か負か

「一騎打ちですって？ ルールを説明しなさい。」

かかったわね。優勝者を負かしたことで出てくるチャンス。

逆転なら今しかない。

魅音はカードをわざとらしくアタシに見せつける。……ちょっとむかつく。

「俺の持っている二枚のカード。右か左、どっちがジョーカーか当てたら、圭子の勝ち！ 負けたら あ……、くくつ。」

「いいわよ。でも、魅音がしこんだの？ もし、二枚とも普通のカードかもしれないじゃない。そうしたら……。」

「じゃあ、圭子を選んだらもう一枚も公開、これでいいだろ？」

傍観者となつた3人の、つばを飲み込む音がはつきり聞こえた。

「やってやるわ、いいわよ。」

戦いのコングが、鳴る。

まずすることっていったら、アタシの知っている知識とカードの特徴と照らし、検索。

右のカードは、目立った傷がなく、わからない。

「慎重にね。がんばって！ 圭子ちゃん！」

レンが応援してくれる。そして、レンの応援がアタシの落ち着きを取り戻してくれる。

「ありがと。逆転のチャンスだもの！」

ええつと、左はいくらか、自分の検索にヒットするところがある気がしなくもない。んん？

「あ、あのカード……！」

沙都史の些細な言葉ものがさず。それに反応して、魅音が舌打ちつと。

は。なるほど。

アタシはわからないけど、このカードは、二人の反応からしてさ

っきのゲームに出てたらしい。

ゲームにでている、イコールジョーカーではない？

「んー？ 圭子は右が怪しいと思うか。じゃ、右にするか？」

魅音が右のカードを強調するため、右の手を前に出す。

さて、悩むものね。

少し思考して見ましようか。

左がジョーカーではないと知ってしまった以上、右がジョーカーでないとおかしい。魅音に言われるまでもない。右が怪しいわ。

でも沙都史の反応だけで決めるのは早い気が……。なにかはつきりするものがほしい。

……。あ。思い出した！

左のカード。あれは……。やっぱり、クローバーの7！！
「うん。クローバーの7、だね。」

レンの言葉の通り、そうすると、右がジョーカー！ 勝った！

右のカードに伸ばす手を、ぴたりと止める。なるほど。口から思わず笑いが漏れる。

「え、なんですか？ だって左がジョーカーって、」

「しー、だよ。」

魅音は、今の状況を楽しんでいるようだ。そりゃ楽しいわよ。

「へえ、圭子はどうして、『右がジョーカーじゃない』って思うんだよ？」

魅音の発言が、アタシを除く部員を困惑させる。魅音、アタシを試している？

「アタシが今言えるのは、『右はジョーカーかわからない』ってことと、そして、『左はクローバーの7』ってコトだけよ。」

「どーしてですか！ 左がクローバーの7、右がジョーカーじゃないんですか！？ そういう約束でしょう？」

「ええ、そういうことでしょう。」

「圭子は勘がいいね。」

「え、綾君、どういっ……。」

こーゆー時は、かつこつけてためるのがいいわ。せーのつ、
「クローバーの7つてのは、アタシが沙都史のカードと一緒にゲー
ム中捨てたんだよー!!」

き、きまつたあ……。

場は騒然! 3人がカードの山を探るが、ぐちゃぐちゃのカード
に紛れた真偽はわからない。

「つ・ま・り 魅音! あんた、クローバーのカードを、カード
に重ねてるでしょ。」

「じゃあ、なにかのカードをクローバーの7に見せかけている?」
わかる。魅音の顔に、『にやけ』だけでは隠せていない、『焦り』
が見える。おそらく、アタシの推理は、あっている!

「ジョーカーは左よお!!!!!!」

熱い、一言。

この瞬間は、ダイヤモンドよりも、深い価値がある。

みんなが、アタシの勝ちを確信してる。

勝った。

「部長として、俺も数々のプレイを見たが、圭子。お前はベストだ。
ベストオブベストオブベストオオ!!!!!!!!!!!!!!」

魅音なりの賛辞なんでしょう。両手のカードをこぼした。やった
……。

「すごいすごい。ぱちぱちぱち。」

稜君がアタシの周りを嬉しそうにくるくる回る。

「え……あ、あれ?」

「なーによおー? インチキなんてしてないわよ。アタシは堂々と
ねえ?」

「稜のこの動きは……人をばかにするときだけにするんです……。」
え? ばかに……?

その時、短い悲鳴を上げたのは、レンだった。

「こんなことって……。」

「さすがだよ圭子。お前は頭が良いからな。ここまでよんでくれると思ったよ。……くつくつく。」

魅音が見せたカードは、クローバーの7に隠れたカードは、ダイヤの2！

「前原圭子を、我が部への入部を許可するっ！！」

負けた絶望にうちひしがれているアタシにお構いなしに、アタシの入部を喜ぶみんな。……くうっ、こいつら！ 知ってたなあ！

「あははは！ 魅い君がカードいじり始めた時、始まるんだあつてときどきしちゃったよお！」

「圭子さん、めちゃくちゃ勘がよい方でしたから、右のカードに手を伸ばした時、はらはらしちゃいましたよ！ もうっ！」

「圭子は凄い人だね。これから退屈しなさそうだよさそうだよ。最近、スパイスが欲しかったから。もっと楽しませてよ！」

上から、レン、沙都史、稜のコメント。

くっそ、このこと知っててあんなだけ演技したんだから、相当役者らしいわね。アタシだって、腕を磨いてやるわよ！

「さあて、罰ゲームタァーイム！！」

魅音が、次は目をぎらぎらさせてこっちを見る。……やば。

「マジ？ 見逃してよ！」

「だめだ！ あ、沙都史&稜君！ 取り押さえろ！」

「了解です！」

「にげちゃだめだよ。」

「レン！ なんて書きたい？」

「ちよつと！ 女相手にこれはないでしょ！」

「えつとねえ！ ごによごによ……。」

「へんなことだめよ！ ちょ、ま、いやあああつあつあああああ
！……！！」

帰りの楽しみ

熱かったあの時は終わって、静かなひととき。
アタシ達の影が長い。

「圭子ちゃん、明日、あいてる?」

レンからのお誘い? お誘い? あれ、こーゆーアプローチはも
っと時を選ぶものじゃないの。

「え、ち、違うよ! そんなんじゃないって!」
レンがあたふたする。

あ、違うんだ。ま、おもしろいから、からかっちゃうか。

「なあに? 違うの? もう。期待させないでよ……、バカ……。」

「え、ええ!!」

「ぷっ、だーっはっはっは!! 圭子、お前最強! くっくくくっ。」

「え、なに? なに?」

状況が読めないかわいそうな子犬、って言ったらいい?
謝りますか。

「ごめんね。ウソよ。悪かったわね。」

ちよっぴりの罪悪感を紛らわすように、レンのほっぺをつつつく。
かわいいやつね。

「へー、どこらへんからウソだったんだ?」

「え、落ち込むフリしたとこ。」

「じゃあ、レンから誘われたあの赤面ヤロウは、冗談じゃなく本心
だったわけだ! やっぱ男からの誘いは嬉しいもんなんだな!」

「ち、違うわよー! もう、魅音!!」

こうして、アタシは魅音にいじられ続けた。

「でえ、明日があいてると、なんなの?」

「えっと、何の話？」

話の出发点を忘れるほど、アタシはいじられていたらしい。…くそ、魅音め。

「あ、ああ！ えっとさあ、圭子ちゃんさ、まだ雛見沢を回れないでしょ？」

そういえば。なじんだようでないのね。

学校と、隣町の興宮、ぐらい？

「それでね！ でね！ 魅い君と、この村を回りながら圭子ちゃんに村を案内しようって計画したんだよ。」

魅音が横でニカツと笑っていたのがはつきりとわかった。

アタシは、この村にきて、『人の優しさ』つてものを身にしみるほど味わった気がする。嬉しい。ただ、素直にそう思った。

でも、アタシはまだまだ、素直にはなれないらしい。

「ありがとう。レン、一緒に雛見沢を回りましょうね。」

「う、うん。」

「二人でお弁当つついて、手つないで、夕暮れまで歩いて、夜は……。」

「うん。圭子ちゃんが良いならそれで。」

「おい！ 提案したのは俺だぞう！！」

「お弁当、おいしいのにしてね。」

「うん！」

「無視すんなあゝ！！ 二人が夜のホテル街に消えていったって、チラシをくばぐおっ！」

今、レンが、……………殴った？

「じゃーねー！ 圭子ちゃん！」

笑顔で去るレンの後ろ姿。こえええ！

魅音の心配はしておく。

「ちょ、大丈夫？」

「あはゝ、俺はもうだめだなあゝ。」

「がんばって！ 特訓に特訓で、リベンジするわよ！」

「むうゝりゝ。圭子が俺のかわりしてゝ。」

アタシ達って、最強の格闘王と、お付き合いしてます？

散歩

今日は魅音とレンに村の案内をしてもらう日。

……お母さんめ、帰りにおつかい頼みやがって。
少し遅くに寝たから、遅れたらしい。

「おい！ 女の子が先に待ってるのが普通だろ！」

「ごめん、昨日ダイエット特集みたいなのがあったから。あと、アタシにそういうことは期待しない方がいいわよ。」

「……魅い君、今来たじゃん……。」

「かつかつか……、俺は「密着24時間」見てたけどな」
アタシと同類よ。

さて、アタシの目を引いたのは、レンの持った重そうなスポーツバック。

何が入ってるのかしら？

「レン、あの後張りつてめちゃくちゃ作ったらしい……。」
てゆーことは？

弁当？

「まあまあ！ 大変じゃなかったしね。圭子ちゃん楽しみにしてたし！ だからね。」

だからって……そりゃねえよ。

もう一度、スポーツバックを眺める。スポーツバックなのは、男の子だから良いバックをもってなかったんだろう。

何キロぐらいかしら？

「たぶん……2キロかな？」

「レン、よっこらしよって言ってたからな。5キロ。」

「そりゃないよ、よっこいしょと！」

魅音の意見に賛成。

「お前、これ責任とれよ！」

責任つったって……。

これをアタシが処理しろって言うの？

「女が男を悲しませるとか、シヤレになんねーからな！」

「わかったわよ！　ちゃんと責任とるから！」

アタシにできること、運動しておなかを減らすことらしい。

朝日を浴びて、友達と歩きながら優雅にお散歩……。健康的。

何しろ「ド」がつくほど田舎だからね。

休日出勤のサラリーマンもいないし。

ホント、良いところね。

しかし、歩いていると少し疑問が浮上する。

「あら、魅音君にレン君！　おとなりは……噂の前原さん？」

すれ違う3人中3人アタシのコトを知っている。……なにこれ。

「はははっ、ちょい悲しいけど、ここ、人が少ねえからな。大体の人と顔見知りなんだ。」

「つまり、知らない顔が歩いていれば、それは自動的に「前原さん」になるわけ？」

「そーいうことだよ。」

なるほど。つまり、アタシがもし知らない男と楽しく歩いていれば、「前原さんのお嬢さんが、彼氏持ちだ」と村全体に公言してることに等しくなる、てことね。

さらに、恐怖の上にまた恐怖が重なる。

「えっと最初に会った人は、野口商店の駄菓子屋のおじちゃん。趣味は、俳句を作ること。市民センターとかでたまに置いてあるよ。」

「次の人は、松本さんのとこの長男、祐君。アパレル系の会社に最近雇われてがんばっている、とかいつてたぜ。」

「さっきあった人は、診療所で働いているみろくさん。趣味は花の写真を撮ることとか。」

あった人のプロフィールまで覚えている。すげー。

「じゃ、聞いてみましょうか？　ここにいるアタシは誰？」

「えっとねー。前原圭子ちゃん。ちよっと意地悪もするけど、と

「とても優しい女の子。」

「転校して三週間。趣味はごろごろすること。この前、母親と「男の良さ」について話し合い、けんかした、とか聞いたんだが。」

「もういい……。」

「男の良さって、結局どういう結論に？」

「魅音うるさい！」

恐るべき雛見沢！

弁当バトル！

「で、ね　もうそろそろ、お昼にしょ。」

心臓が跳ね上がった……と言つていいぐらいきくつとした。
どうしょ、食べれる自信ないよお。

「圭子、よし！　ここは俺に任せとけ！」

魅音が、頼もしく見える……！（めずらしく）

「レン！　どうせ食べるなら、見晴らしのいいとこにしようぜ！」

「うん！　賛成！」

アタシ達は、場所を移動した。

石の階段を上ったそこには、想像できた風景だった。木造の古い
年季の入った神社。でも、とても綺麗に清掃がされてあるようで、
あまりぼろい感じはしなかった。

「ここはね、古手神社っていうんだよ！　一番この景色がきれい
なとこかなあ！」

「ここは覚えといたほうがいいぜ！　今度ここで村のお祭りがある
からな！」

ちよつと祭りのシーズンではないわね。

「ホントはな、確か、冬の終わりを喜ぶお祭りっていうんだ。」
都会かぶれ乙。

「さーてっ。お弁当をひろげて……っつと。」

良いにおいがする。彩り、香り、味も完璧なお弁当つてのは、見
ただけで普通のお弁当と違いがわかる。さて……これをどうするか
なあ。

景色だけじゃおなかは減らないし……。

「こんにちわ。」

あれ、聞いたような声？

そこにいたのは、ちょこんと立っていた、稜君と沙都史。
なるほど！ 人海戦術！ 魅音、感謝するわ。

最後のシメはアタシがするわよ！

「ちよっと！ 人様の庭で何してらっしゃるんですか！」

「さあ、ごらんなさいよ！ ビュッフェよ！ ランチ！ レンのお弁当を、いい景色と一緒に食べるのよ！」

「でも！ 勝手にゴザしかれても！」

「神社は公共スペースでしょ？ 良いじゃない？」

「そうだよ、沙都史。みんなのおにわだよ。」

「くう、稜君最高！ 座って座って！ 一緒に食べよ！」

「ちよっと！ 私の分は！」

「なし！ 沙都史の分はぜんぶアタシが食べる！ 以上よ。」

「なんですか！ 稜！」

「はい、お箸。」

「いや、圭子のせるのうまいな。才能あるわ。」

魅音、ありがと。

「はい、魅い君と稜君お皿。」

「じゃ、みんなでいただくとするか！」

「いっぱい食べなきゃならないね。」

レンが水筒のふたをあける。

今更気づく。このお弁当、五人分を想定して作ってるんだ。それでも多いけど、意味は全く異なることに気づく。

「私のプチトマトオオ！」

「アタシはね！ プチトマト大好き人間！ 沙都史なんかにわたすもんですか！」

「くー、じゃ、唐揚げもらいますよー！ あーん！」

「ぐはっ！ 押しのけないでよ！」

「襟をつかんでる人に言われたくないですー！！」

激しい戦闘。沙都史がアタシを押しつけ、唐揚げにかぶりつく！

それを、襟を持って制止する！ やっぱ、体の大きさで言えば、アタシの方が有利！

「ああああああああ！ 唐揚げ様あゝ……………」

「あはははっ！」

一緒に喉にプチトマトを詰めてしまい、もがいている。

レンがおたおたして、それと同時にかわいいモード発生。なぜ？ 稜君、ご満悦でアタシ達の頭をなでる。

レンをおさえるとともに、温かいまなざしを向けてくれる魅音。

いつもと変わらない温かい、お昼の出来事。

こんな日常が壊れるなんて、考えられない。

壊すものがあるなら、アタシは、どんなことをしても戦う。

絶対、守るから。

リンゴを巡って

「ふ、食った食った。」

ブルーシートに横になると、魅音が、女のくせに、と、ため息を
ついていた。

…悪かつたわね。

「なんでさあ、日本には食事に感謝する言葉が少ないのかしら？」

「食事の団らんつーのは、近代になって取り入れられたからな。」

「昔の人は無言で食事を済ませたらしいから。作る人は寂しかったらうな。」

「きつと、食べることで精一杯だったんですね！」

沙都史、そりゃあんたのコトよ。

「いたた！ ほっぺつねないですよ！」

また騒ぎ始める。

「でも、『おいしい』の一言だけでもうれしいんだよ。作ってきてよかった、ってなるんだ。」

「おいしいよ。」

⌈
^
?
⌋

そういつたのは稜君だ。

稜君は、レンに駆け寄って、ありがとう、おいしい、と、繰り返していった。

……レンの様子が？

「あうううううう！！！！
ありがと、ありがと！
稜君！！

おおお、お礼にこれ！
うざぎさんのリングあげるね！
いっばい食べて食べてえ！」

かあ
いいい
モード
キタ
ー！！！！

レンの手にあったのは、タッパーに詰め込まれたウサギのリンゴ。それをほおびりながら、稜君がこちらを向く。……怖い！

「お二人には、レンさんからリングをいただくことができるでしょうか？」

「はえ、沙都史ずいぶん強気だなあ？ やって見せろよ？」
ふふん、と鼻で笑う沙都史。

レンの近くまで駆け寄り、こういった。

「あ、あの！ ボクも、レンお兄ちゃんのリング、食べたいな！」

「ずござおおおおおん！！」

「あう！！！！ ささあささっさ、沙都史君も、ほほしいんだね！！ はいいいっ！」

沙都史がこちらを見て、ニヤリ、とする。

さあ、どうなさいます？

沙都史の目が、そういつている。

負けてられないわね。

「魅音？ どうする？」

「安心しろ。俺に良い案がある。」

「ホント！ よかった。」

「やるのは圭子。」

「はあああ！？」

そこで、魅音の作戦を聞く。なるほど。

ここで勝つのは、アタシよ！

レンの隣に座る。そして、優しくささやく。

「レン、お弁当作るの上手ね。うらやましいわ。」

「あはは、ありがと、でも、これほとんど、冷凍食品なんだよ……。」

「でも。手作りのはあるでしょ。」

「うん、どれかわかる？」

「知ってるわ。これ、よね？」

「あ、当たり、だよ！」

ここまでは魅音に聞いている。ここから、アタシの実力の見せ所。さあ、勝負！

「どうしてわかったの？」

プチトマトを口に入れて。ごくって喉がなる。

「……レンの、………においがしたから………。」

シン。

空気が凍り付く。

沙都史が歯をがちがちならし。

魅音がニヤリと笑い。

綾君が、こちらを見ている。

勝った……。

「あうううううううううー！！ りりりりりりりんご！ たべ

てたべてたべてたべてー！！」

「わああああー！！」

「私の負け、なのですか………。」

「圭子サイコー。」

綾君が、リンゴを見つめている。

それが心配になったのか、レンが駆け寄る。

「綾君、どしたの？ 塩水濃すぎた？」

「ウサギさんが、かわいそう。助けてあげて？」

「あうううううううううー！！！！ いいいいいっばいあげるううー！

これでもう寂しくないよ？ あううううー！！」

「ぎゃ、逆転負けかよー！？」

「ほう、ほっひへほひひほ（もうどっちでもいいよ）………。」

温かい日差しの中の、楽しい出来事。

レンの「宝の山」

思いつき騒いだ後、解散となり、魅音と別れ、レンと二人だけとなった。少し、夕日が出てきて、夕方になりつつあるようだ。…楽しかったなあ。

「圭子ちゃん？ この後、何か用事ある？」

「え、どこかいくの？」

「う、うん。ちょっと寄り道だよ。」

まあ、少しぐらいいいかな。まだ、遊んでいたいし。

アタシが、別に良いよ、っていうと、レンは嬉しそうな顔をして、こっちだよ、と案内した。

葉が生い茂る、木の道を通り抜けると、広い、河原のようなところに出た。

自然だ。すごく綺麗だ。

そこで、ふと気づいた。この景色に似つかわしくないものが積み上げられている。

車だの、ほうきだの、タイヤだの、人形だの、おわ！ これなんか店に置いてるマスコットじゃない！？ ガラクタの山、という言葉が似合いそうね。

「レン、こことて……。」

「ここはね！ 宝の山なんだよ。」

「え？」

「あ、新しい山ができてるうつつうつつ！ わくわく、わくわく。」

レンは、軽い足取りで、ガラクタの山をかけ上ったり、下ったり。どうやらここは、不法投棄されたゴミらしい。

……ひどいなあ。

「レン！ 危ないわよ！」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ！ 圭子ちゃんはそこで待ってて！」
都会の子と、田舎の子の差がついたような気がした。レンは体が軽そうだ。

アタシは、とりあえず座れそうな場所を確保した。

「どっこいしょ、と。」

おしりが冷たい。ゴミの上に座るのは良い気分じゃないわ。

「あらら、若いのにそんな言葉つかっていいの？」

後ろから声がした。

女の人だった。帽子を後ろ向きにかぶって、ノースリーブの紺色のシャツ。カメラを構えて、にっこりとしている。活発そうな雰囲気だ。……誰？

「驚かせてごめんね。ちょっと綺麗な被写体がいたもんだから。」

「被写体の人から許可は取った方が良いと思いますけど。」

「じゃ、一枚いい？」

「嫌です。」

「厳しいー。あはは。」

話していると、何となく気分が落ち着く。大人だ。

活発そうだが、話してみると、落ち着いた人だとわかる。カメラなら、カメラマンかしら。

「おっと、自己紹介してなかったわ。私は富竹じゅんこ。趣味は、花の撮影。ちなみに椿が好きかな。」

「アタシは、前原圭子です。最近引っ越して来ました。」

「あ、貴方、前原屋敷のお嬢さんね！ よろしくー。今度、モデルになってよ。綺麗にとるから。」

富竹さんか。雛見沢の住民、ではなさそうね。

富竹さんは、レンに気づいたのか、不思議そうな顔をしてアタシに訪ねてきた。

「彼氏、あんなとこに行かせて良いの？」

「彼氏で……、なんか宝の山らしいです。」

「へえー、なにしてるのかしら。」

「さあ？ 殺された死体の一部でも探してるんじゃないんですか？」
ブラックジョークのつもりだった。でも、富竹さんは、妙に深刻な顔になる。

「……嫌な、事件だったわね。あと右手、だっけ。」
「え？」

「い、今。なんていった？」

「事件？ 右手？ この村で何かあったわけ？」

「あの、なんですか？ それ？」

「ん？ え、知らない、ええ？」

参ったな、と、富竹さんが、笑ってはぐらかす。アタシに隠していることがある。その事実だけで、アタシは気分が悪くなった。

みんなが、何かを隠している。

レンも、魅音も、沙都史も、稜君も。

「なんですか、その『事件』って。」

「圭子ちゃん。おわったよー！」

「あ、やば。じゃーね！」

「富竹さん！」

あ、情報源が、遠ざがってしまった。あゝあ。

レンは、かわいらしいクマの人形を抱えていた。

……小学生かつーの。

「ごめんね。待たせちゃったね。」

帰り道。アタシの態度が暗いのか、何となく喋らなかった。それもまた、気分が悪くて。

思い切って、聞いてみるわ！

「レン、宝の山って、あそこなんだったの？」

「宝の山は宝の山だよ。あう！」

ぬう。

「ねえ、さっきの場所で、何かあったの？」

「ん、何か？」

「たとえば、事故とか、殺人と、」
「なかった。」

ぴしゃりと言いつけられた。
はつきりわかる。拒絶。

この話題には触れない方が良さらしい。
少し、怖い。

「実は、僕、去年引越して来たんだ。」

「そ、そうなの？」

「うん！ だから、この村の事は詳しくは知らないや。」
「そ、そう。」

結局、何もわからなかった。

ただ、わかったのは、みんなが、何かを隠している事だけ。
アタシの心に残ったのは、レンのあの声と、不快な気持ちだけ。

魅音との違和感

部活が終わると、レンはすっ飛んでいった。

帰り道、魅音と二人だけだ。

「あいつが行くところさあ、ゴミ山なんだよなあ。」

呆れたように魅音が言う。

アタシも見てびっくりした。

雑木林を抜けたところにある、不法投棄のゴミの数々。

あれを、お持ち帰りいゝ、と最近の男の子が飛びかかる光景。

……………恐ろしい。

「あつこはな、昔戦争が合ったんだよ。」

「？」

「ダムを役人どもが建てるつつって、シヨベルカーだのダンプだの作業着の男だの、偉そうな奴らがわんさか入ってくるわけ。」

「それで、村で戦った、というヤツ？」

「ビンゴ。もう、俺も暴れ回った。ま、奴らは村のこともなあんにも考えずにダムなんかいいやがるから。それで、村の圧勝！ 完全勝利！ わっはっはー！！」

気持ちよさそうに笑うなあ、こいつ。

確かに、そんなことがあるなんて信じられない。こんな美しい村が沈むなんて、もったいない。

きつと、村中が一致団結して、戦ったんだろう。

アタシはその中に入っていないから、するりと割り込めるぐらい、この村になじめればいいなあ。

でも、違和感が拭えない。

この前、富竹さんに聞いた話。

「……………嫌な、事件だったわね。あと右手、だっけ。」

よし。

「魅音。なんか事件とか起きなかったの？」
「ん？ と聞き返す。」

「たとえば、傷害ざたとか、さつじ、」
「なかった。」

またぴしゃりと、言い切られる。
気持ち悪い。

「んじゃ！ また明日なー！」

「うん、バイバーイ。」

魅音の背中が遠くなる。

綿流し

「綿流し」とは、冬に使った綿、布団を供養して、川に流すお祭りらしい。針供養みたいなものだろう。

綿を、重たい鍬でかき回し、綿をちぎって村人一人一人が川に流す。鍬を持って供養するのは、代々古手家の役割で、古手家頭首の役目。現在は、古手家頭首の後継ぎ、古手稜がこれを行っている。

供養には、神官の格好をし、鍬にはしめ縄、鈴など、かなりの重量。稜の練習は子供用ではあるが餅つきのかねを使って練習しているそう。この作業は、肉体的にも十分負担になる。

我が部活メンバーが古手神社の前に集まる。

今日は綿流しのお祭り。なんかお祭りで騒ぐのは毎年の恒例行事らしく、四凶爆闘（？）とかいうらしい。ネーミングセンスが無すぎる。

「去年は、おじさんたちに怒られたからね！ あう！」

レンが楽しそうに言う。そりゃこのメンツで回ったらさぞ楽しいだろう。

お、来た来た。

稜君は神官の役をするらしく、和服だ。剣道着のような、袴。

「似合うねえええ！！！」

「レン、落ち着け。裾大丈夫か。ピン預かってるけど。」

「以外と快適だよ。」

「さあ、もう行かないと始まっちゃいますよ！」

お、戦闘開始ね！

始めは、あ、たこやきい！！ おいしいよね。

「たこ焼き早食い！　いくぜおめーらー！！」

威勢のいい返事が響く。

負けないわよ！

「はふふふつはは！」

「圭子さんは一気に口に入れすぎですよ！」

「ういうゝ。（みず）」

「はいはい！　圭子ちゃん！」

水をのどに流し込む。……窒息するところだったあ。

「次は焼きそばだ！」

「今度はかき氷にしよう！」

「あ、イカ焼きあるよ。」

「私はお好み焼きを！」

次から次に騒ぎまくり、おじさんたちは面白がって、途中からほとんどお金はチャラだった。

「あ、楽しんでるわね。」

富竹さんだ。

魅音たちも知り合いらしく、ぺこぺこと挨拶する。

「いいわね。若いのは楽しそうで。」

「富竹さんも一緒に盛り上がりましょうよ。」

アタシが提案すると、みんなもそうだねそうだね、はいつて、と誘う。

富竹さんは、あはは、と軽く笑って、先輩ヨロシク、と来てくれた。

「歓迎しますよ！　富竹さん！」

「魅音さん！　部活の心得を教えましょう！」

「お、そうだな、よし！　我が部はだな。社会のあらゆる状況に応

じて対応する……………」

アタシが入ったときみたいで、思わず顔がほころぶ。

村の悲劇

富竹さんが入ってから、また、騒ぎまくった。

銃で景品を落とすやつで、富竹さんとの共同作業で見事！ でつかいクマのぬいぐるみをゲットした。

あ、ぬいぐるみはレンに感謝のしるしで渡して。魅音にからかわれたな。

いよいよ、このお祭りのメイン。稜君の奉納演舞。

沙都史が、急いで急いで、と稜君を急かす。

部員の晴れ姿をすっかり見届けよう、と、早くから会場で待っていた。

太鼓の音が会場で共鳴する。

それに合わせて、神官姿の稜君がゆっくりとした足取りで出てくる。やっぱりこういう時には、歩き方とか決まっているそうだ。

やっぱり、田舎独特の「舞」とか言うヤツは、都会では見れない。この感動は、田舎者にはわからないだろう。都会に住んでいるからこそ、この美しさを実感することができる。

ここに引越してよかった。

改めてそう思う。

奉納演舞に集中していたせいか、終わると、仲間とはぐれていた。供養した綿を川に流すお祭り、というのを思い出し、神社を降りて、河原に出てきた。

蝉の声と、川の流れる音が夏の訪れを感じさせる。

見たことある背が見えた。富竹さんだ。隣に、男の人がいる。声はかけないほうがいいらしい、と思ったので、無視しようとした、が。

「前原さんだね。もう、奉納演舞は終わった？」

男の人が声をかけてきた。一応答える。

「はい。」

「よかったね、稜君の演舞。」

「そう、ですね。」

一応受け答えの言葉は見つかる。

この男の人は知り合いでもない。村で何度か挨拶しただけだ。なれなれしく話すこの男に、不信感を感じる。

「さあ、今年は、誰が亡くなるかなあ？」

……………え？

亡く、なる？

「三六さん、圭子ちゃんは知らないの。やめてよ。」

「ああ、ごめんね、ジュンコ。でも、君も気になるだろ。」

何を、話しているのだろう。

今年は、というのなら、毎年、亡くなっている？

「あの、なんのことですか？」

「圭子ちゃん。聞かない方がいいわ。」

確かに。アタシが足をつつ込む話題ではないかもしれない。

でも、仲間はずれにされるのは気分が悪かった。

ここで、すべてをはっきりさせておきたい。

もう一度、同じ問いを繰り返した。

男は、さすがにアタシが真剣な顔をするので、戸惑って、アタシに向き直った。

「聞かない方がいいかもよ。」

「かまいません。教えてください。」

男はふうつと息を吐き、富竹さんはやれやれ、と後ろを向いてたばこに火をつけた。

一つ約束された。誰にも言いふらさないこと。

こくんと頷くと、男は語り始めた。

今から4年前の、今頃。6月の終わり。

この村にダム建設の話が持ちかけられ、村は激しい戦場のようになっていた。

それに終止符を打つ、事件が起こった。

ダムの現場監督が、バラバラにされ殺害された。現在、犯人の一人と思われる作業員が一人、行方不明らしい。

3年前、ダム建設の賛成派だった北条家夫妻が、旅行先で橋から転落。

転落の理由として、柵が古く、たまたま壊れたらしい。

夫の死体は発見されたが、妻は発見されなかった。

2年前、古手神社の神主の夫妻が死亡。

妻は、病死。夫は、「死んでオヤシ口様のお怒りを鎮めに参ります」という内容の遺書を残し、鬼ヶ淵沼で自殺したと思われる。死体は発見されてない。

1年前。北条沙都史、悟子の義理の母、北条玉枝が撲殺され、死亡。犯人は、自殺したらしい。

そして、その数日後、北条悟子が行方不明。

言う言葉もない。

毎年、誰かが、綿流しの日に、亡くなっている。

異常なほどに寒気を感じる。

「ね？ どう？」

聞いてくる、普通の顔をした男。

異常だ。吹き抜ける風が、さっきは気持ちいいとさえ思っていたのに、今は、気持ち悪いとさえ思う。

やっぱり、聞かなければよかったかもしれない。

その後、魅音たちと合流し、適当に話して家に帰った。

あの男の、淡々と語る、あの話が、頭でぐるぐる回っていた。

コワレル

次の日。あの話はまだ耳に残っていたけど、いつもと変わらない一日だった。

朝、魅音が遅刻して。

沙都史のトラップに思い切りかかって。

綾くんがなでなで。

レンがお持ちかえりいい！！　みたいな感じで。

昨日の話は、きれいさっぱり忘れよう。

そう決心したのは、部活の途中だった。

その矢先。

「前原さん。お客さんですよ。」

知恵先生から呼ばれる。軽く謝って、教室を出る。

廊下には、白髪の濃い、女の人がいた。タバコを吸って、口元を少し緩める。

「前原さんね。初めまして。私は、大石蔵子。こういう者よ。」

勝手に自己紹介をしている。わけわかんない。

名刺みたいなものを見せられる。……警察！

「車、クーラーきいてるから。そっちで話しましょう。」

つかつかと歩いていく。大石さんにとりあえずついていく。

車の中は、クーラーがガンガンにきいていて、寒いくらいだった。

「直射日光は、やっぱり避けた方がいいわね。シミができちゃう。」

車に入っただけの一言がそれだった。なんていったらいいのかわからず、黙ってしまう。

「ふふ、大丈夫。取り調べなんかじゃないわ。ちょこっと、聞きたいことがあるの。」

聞きたいこと。なに、それは。

……………オヤシロ様の、祟り？

「昨日、富竹さんがお亡くなりになりました。」

「……………そんな、馬鹿な話、

「のどを掻きむしって。爪でがりがりつとやったらしいわ。富竹さんと昨日、一緒にいたでしょう？なにか、おかしいことはなかった？」

「……………いえ、特に……………」

「思い出せ、なになかったか？」

富竹さんと合流して、一緒に部活して。奉納演舞のあと、男の人と話した……………」

あの話は普通じゃなかったけど、富竹さん自身は、異常がなかった、はず。

ただ、アタシが気づかなかっただけ？

夜だったから、暗くて顔はよくわかんなかった。

どうなの？

富竹さんは、オヤシロ様の祟りで
ケサレタ？

「わからないなら、もう話はいいみたいね。この話は、あまり村の人にはしないでね。」

「なんで、ですか。」

「この村じゃ、オヤシロ様の祟りは、公の場には出しちゃいけないの。特に、あなたのお友達には、絶対にしゃべっちゃだめ。」

「だから何で、」

「園崎さん、オヤシロ様の祟りに関わってるかもしれないのよ。」
「え？」

話を打ち切られる。一応、ということで、電話番号をもらった。
意味があるかは分からないが。

「じゃあね。前原さん。」

大石さんは、ふらりと帰ってしまった。

異常だ。のどを引つ搔くなんて。富竹さんと似ている人じゃないのか？

のどを引つ搔くなら、血で、顔がわからないのではないかなにかの間違いじゃないか。

この話を忘れたい思いでいっぱいだ。

頭痛がする。

帰り道

帰り、レンと一緒に帰った。

アタシは、あの話の後、ある考えに陥った。

レンたちは、アタシに、オヤシロ様の崇りのことを教えてくれなかった。

仲間って、隠し事はないものじゃないの？

ずっとかくしてたのよね。

前から、何かおかしかったものね。ダムの話も触れたがらなかったし。

もうこの際、はっきりしてほしい。

レンに聞こう。そう思って、スカートの裾を握る。

「ね、レン。なにか、隠してない？」

レンは、くるりとこっちを向いて、大きく目を見開く。くびを横に振る。

しらを切るのかしら。

「何か、隠してるでしょう？」

「なんにもないよ。どーしたの？」

びっくりするほど表情が読めない。

「だからっ！！ レンは、」

「じゃあ、圭子ちゃんはどう？」

レンが近づいて、アタシの目をのぞき込む。

レンの目がはつきり見えた。どろり、と、青いものが。

「圭子ちゃんは隠し事、してるよね。」

「アタシが、いつ、したの、よ。」

声が震える。

レンがにつこり笑う。今となつては、その笑みは、アタシを震え上がらせるだけだ。

「お客さん、圭子ちゃんは、知り合いって言ったよね。でも、実際

はおばさんだったでしょ？ 誰かわからない。」

アタシの嘘が、読まれていた？

そんな、外に出たときは、確かに誰も見ていなかった……？

「誰？ あの人？」

「だから、知り合い、」

「嘘」

なんなのよ、これ。

さっきまで、明るい顔をしてたレンが、こうやってアタシを追いつめている。

「圭子ちゃんを心配してるんだ。」

そういつて、アタシの頬を触る。

冷たい手だ。

レンが、もう一度聞いてくる。

ホントのことをしゃべろうか。

でも、アタシは、しゃべりたくない。怖い。

「レンたちのことじゃ、ないから」

「嘘つくなっ……！」

レンが、アタシの、ほっぺを、叩いた？

右頬が、熱い。

レンが、まるで、獲物を狙う鷹の様に、目を鋭く光らせて。

こいつは、誰？

レン、じゃない。

レンだけど、レンじゃない、誰か。

アタシは今。何を見ているの？

「僕だって、隠し事ぐらいするよ。ね？」

レンが笑っている。

さっきとは、顔が違う。レンに戻った。

息が上がる。何なのよ。レンが、怖い。

レンは、先に歩いていつてしまった。

彼が見えなくなるまで、アタシは、地面に座り込んでいて、さっきまでの出来事を思い出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8364m/>

ひぐらしのなく頃に 反

2011年6月25日22時55分発行